

## エネルギー消費を拡大する原発、小さくする自然エネルギー

西尾 漢／原子力資料情報室共同代表

「エネルギー政策の目指す方向は、『原子力か新エネルギーか』ではなく、『原子力も新エネルギーも』であると、原子力委員会が『原子力政策大綱』（2005年10月決定）を策定するための会議の中で提示された資源エネルギー庁原子力政策課の資料にあった。そう言いながら、おびただしいページ数と贅言を費やして原子力のメリットを謳いあげるといって、自然エネルギー（原子力政策課では「新エネルギー」と言っているが、ここでは自然エネルギーと同義とみなし、そのように言い換える）にはわずか1ページで、しかもデメリットを強調するのみなのが、なんともおかしかつたのを覚えている。それだけ世の中では「悪玉の原子力か善玉の自然エネルギーか」というイメージが定着している、と被害者意識に凝り固まっているのだろう。

そこで、本音を抑えこんで自然エネルギーを敵視しないようにし、むしろその人気にあやかすることで原子力も認めてもらおうというのが、「原子力も自然エネルギーも」ということのようなのである。そのほうが温和に聞こえ、受け入れられやすそうだ。しかし、やはり問題は「原子力か自然エネルギーか」なのだと思う。

「原子力か自然エネルギーか」というのは、同じだけの発電量を得るのに原発を選ぶか太陽電池を選ぶかといったことではない（原発1基を代替するのに太陽光発電だと山手線の内側の何倍の面積が要るといった比較がよく持ち出されるが、太陽電池の効率や使用形態は大きく変わりうるし、比べるのはそう簡単ではない）。原発推進の論理はここでいっきょに、自然エネルギーはたくさんのエネルギーをつくりだすことができず、原発の代わりにはならないと結ばれるのだ。

しかし、むしろその点こそが自然エネルギーの何よりも優れている点ではないだろうか。すなわち原発はエネルギー消費を拡大しながらでなくてはつかえないエネルギー源であるのに対し、自然エネルギーは、エネルギー消費を小さくすることにつながるエネルギー源だということである。言い換えれば、自然エネルギーは原発に代わるのではなく、原発を必要としない社会をつくるものだと言ってよい。

現実的には当面、化石燃料にエネルギー供給の多くを頼らざるをえないが、原子力を選ぶ社会か自然エネルギーを選ぶ社会かによって、化石燃料の利用の仕方もちがってくる。「原子力も自然エネルギーも」とは「化石燃料も原子力も自然エネルギーも」であり、「原子力か自然エネルギーか」での自然エネルギーは、脱原子力とともに脱化石燃料をめざすものなのだ。

なぜ原発は、エネルギー消費を拡大しながらでなくてはつかえないのか。それは、原子力では電気しかつくりだせないからである。原発の増加は、エネルギーの利用形態を電気中心に変えていくことで初めて成り立つ。ところが原子力や

火力の発電所では、発電をするときのロスが大きく、電力化率が高まるほど、エネルギー消費は増大することになる。電力化率を高めなければ、より大胆な省エネルギーが可能なのである。

原子力は、電気の形にしてからでなくては利用できない。原子力自動車も原子力ストーブも存在しないことは、周知のとおりだ。原子力で水素をつくり燃料電池で自動車を動かすとの宣伝もあるが、そこまでして原子力をつかう意味はないだろう。

そのうえ原発は、停止しているとき以外は常にフル出力で運転される。それに見合った電力需要が必要とされるのである。

原発は、自身が電力消費の増大を要求するだけでなく、他の発電所も増やして、さらに電力の消費増を求める。電力の需要の変化に合わせた出力の調整ができないため、出力調整用には他の発電所が要るからである。原発を増やせば、それに応じて出力調整用の発電所も増やさなくてはならないことになる。

また、事故で止まることの多い原発は、バックアップ用の発電所を増やす必要がある。原発を増やせば、出力調整用やバックアップ用の発電所も増やさざるをえない。結果として電力化率をいっそう高め、ますます省エネルギーに反するのだ。二酸化炭素の放出も、けっきょく増えることになる。

議論の分かれ目はエネルギー消費を拡大しつづけるか否かであり、原発はエネルギー消費を拡大しつづけることと切り離せないところに問題がある。エネルギー消費の拡大を支えるために原発が要るのではない。原発のある社会が、エネルギー消費の拡大を促すのである。

自然エネルギーにしても、大量に利用しようとするれば、やはり環境に悪い影響を与えることは避けられない。利用が進んで大きな役割を果たせるようになると、風力発電反対運動の例のように、新しい課題が姿を見せるかもしれない。しかし、大規模集中型の原発とちがって、小規模分散型の自然エネルギーなら、それに見合った解決方法がきっと見つかるだろう。原発のように計画発表から運転開始まで長年月かかるものと違って、軌道修正の小回りもきく。何よりも市場価格に大きくふりまわされないという強みが、自然エネルギーにはあるのだから。

自然エネルギーが活用されれば省エネルギーにつながり、省エネルギーが進めば自然エネルギーの活躍の場が大きくなる。互いに加速し合って、自然エネルギーを中心とした、エネルギーをあまりつかわない社会をつくっていけるだろう。

★原水禁エネルギー・プロジェクト『持続可能で平和な社会をめざして』  
(<http://www.peace-forum.com/gensuikin/EnergyProject.pdf>)より